

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四條金吾殿御返事

しよりようかぞう こと

(所領加増の事)

新版
1604
〜
1606

しじようきんごどのごへんじ しよりようかぞう こと

四条金吾殿御返事（所領加増の事）

こうあんがんねん

弘安元年（'78）

10月

57歳

四条金吾

がもくいつかんもん た そうら お

鵜目一貫文、給び候い畢わんぬ。

ごしよりよう かみ たま たま そうろう

真

御所領、上より給わらせ給いて候なること、まことと

おぼ そうろう ゆめ 余 ふしぎ おぼ そうろう ごへんじ

も覚えず候。夢かとあまりに不思議に覚え候。御返事な

もう おぼ そうろう

んどもいかように申すべしとも覚えず候。

ゆえ 殿 おんみ にちれん ほうもん おん

その故は、とのの御身は、日蓮が法門の御ゆえに、日本国

鎌 倉 ちゆう みうち ひとびと 公 達 受

ならびにかまくら中、御内の人々、きゆうだちまでうけず、

不思議 そうら みうち

ふしぎにおもわれて候えば、その御内におわせんだにも

ふしぎ そうろう

ごおん

被

たま

打

返

不思議に候に、御恩をごおんこうぼらせ給たまえば、うちかえし、

たま

どう

隸

またうちかえしせさせ給たまえば、いかばかり同れいどもも

不思議 思

思

かみ

余

思

ふしぎとおもい、上もあまりなりとおぼすらん。されば、

疑

おも

そうら

このたびは、いかんがあるべかるらんとうたがい思おもい候そうらい

うえ

みうち

すうじゆうにん

ひとびと

訴

そうら

つる上、御内の数十人の人々うったえて候そうらえば、されば

叶

難

こそ、いかにもかながたかるべし、あまりなることなり

うたが

そうら

うえ

きようだい

捨

と疑ごい候ごいつる上、兄弟にもすてられておわするに、か

ご 恩

めんぼくもう

かる御おん、面目申めんぼくもうすばかりなし。

ところ

殿

岡

さんばい

そうろううえ

佐

渡

くに

かの処ところはとのおかの三倍とあそばして候そうろううえ上、さどの国

者

そろうろ

ところ

知

そろうろ

もう

のものこのれに候が、よくよくその処をしりて候が申

そろうろ

さんかごう

うち

もう

だいいち

ところ

し候は「三箇郷の内に、いかだと申すは第一の処なり。

でんぱた

少

そうら

徳

量

無

もう

そろうろ

田畠はすくなく候えども、とくははかりなし」と申し候

にしよ

御年

貢せんかん

いっしよ

さんびやくかん

うんぬん

ところ

ぞ。二所はみねんぐ千貫、一所は三百貫と云々。かかる処

うけたまわ

なりと承る。

同

隸

親

ひとびと

もう

なにとなくとも、どうれいといい、したしき人々と申し、

捨果

笑

喜

殿

岡

劣

すてはてられて、わらいよろこびつるに、とのおかにおとり

そろうろところ

おんくだ

ふみ

たま

そうら

て候 処なりとも、御下し文は給わりたく候いつるぞか

さんばい

ところ

そろうろ

悪

し。まして三倍の処なりと候。いかにわるくとも、わる

由 ひと

かみ

もう

たも

そうろう

良

きよし、人にもまた上へも申させ給うべからず候。「よき

処

もう

たま

重

たま

ところ、よきところ」と申し給わば、またかさねて給わら

たも

悪

ところ

とくぶん

そうら

てん

せ給うべし。「わろき処、徳分なし」なんと候わば、天に

ひと

捨

たま

そうろう

おんこころ 得

も人にもすてられ給い候わんずるに候ぞ。御心えあるべ

し。

あじやせおう

けんじん

ちち

殺

そくじ

てん

阿闍世王は賢人なりしが、父をころせしかば、即時に天に

捨

だいち

破

い

ころ

もすてられ、大地もやぶれて入りぬべかりしかども、殺さ

ちち

おう

いちにち

ごひやく

輛

ごひやく

すうねん

あいだ

れし父の王、一日に五百りよう・五百りよう、数年が間、

ほとけ

くよう

くどく

のち

ほけきよう

だんな

仏を供養しまいらせたりし功德と、後に法華経の檀那とな

くどく

てん

ち

破

るべき功德によりて、天もすてがたし、地もわれず、つい

じごく

墮

ほとけ

たま

に地獄におちずして仏になり給いき。

殿

きようだい

どう

隸

とのもまた、かくのごとし。兄弟にもすてられ、同れい

怨

公

達

側

にほんこく

ひと

にもあだまれ、きゆうだちにもそばめられ、日本国の人に

憎

たま

い

ぶんえいはちねん

くがつじゆうににち

もにくまれ給いけれども、去ぬる文永八年の九月十二日の

ねうしのとぎ

にちれん

ごかんき

被

とき

うま

くち

取

付

子丑時、日蓮が御勘気をかぼりし時、馬の口にとりつきて

かまくら

い

相模

依智

おん

供

いちえんぶだい

鎌倉を出でてさがみのえちに御ともありしが、一閻浮提

だいいち

ほけきよう

おん

方

人

ぼんてん

たいしやく

第一の法華経の御かとうどにてありしかば、梵天・帝釈も

たま

ほとけ

成

たま

すてかねさせ給えるか。仏にならせ給わんことも、かくの

ごとし。いかなる大科ありとも、法華経をそむかせ給わず

そうら おん 供 ご 奉 公 ほとけ たも

候いし御とももの御ほうこうにて、仏にならせ給うべし。

れい うとくこくおう かくとくびく いのち 替 しやかぶつ

例せば、有徳国王の、覚徳比丘の命にかわりて釈迦仏と

たま ほけきよう 祈

ならせ給いしがごとし。法華経はいのりとはなり候いける

どうしんけんご こんど

ぞ。あなかしこ、あなかしこ。いよいよ道心堅固にして、今度

ほとけ たま

仏になり給え。

ごいちもん ごぼう ぞくじんとう

御一門の御房たち、また俗人等にも、かかるうれしきこ

そうら もう こんじよう 欲 思

と候わず。こう申せば、今生のよくとおぼすか。それも

ぼんぷ そうら そうろう うえ よく 離 ほとけ

凡夫にて候えば、さも候べき上、欲をもはなれずして仏

成 そうら みち そうら

になり候いける道の候いけるぞ。普賢經に法華經の肝心

と そうろう ぼんのう だん ごよく はな とううんぬん てんだい

を説いて候。「煩惱を断ぜず、五欲を離れず」等云々。天台

だいし まかしかん い ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん とううんぬん

大師の摩訶止観に云わく「煩惱即菩提・生死即涅槃」等云々。

りゆうじゆ ぼさつ だいろん ほけきよう いちだい 勝

竜樹菩薩の大論に法華經の一代にすぐれていみじき

様 しゃく い たと だいやくし よ どく へん くすり

ようを釈して云わく「譬えば、大薬師の能く毒を変じて薬

だい だいどく とううんぬん しょうやくし くすり やまい じ

となすがごとし」等云々。「小薬師は薬をもつて病を治す。

だい だいどく とううんぬん じ とううんぬん

大医は大毒をもつて大重病を治す」等云々。

こうあん がんねん つちのえ とらじゆう がつ にち にちれん かおう

弘安元年戊寅十月 日 日蓮 花押

しじよう きんご どのごへん じ

四条金吾殿御返事